

# フルセットかよ、この野郎

月岡 誠 — 編集者/ライター

『鉄輪』 藤原新也/2000年



私にとっての藤原新也さんは、大学時代に出た『東京漂流』『メメント・モリ』（ともに1983年刊）の人です。安定成長期だった当時、寮に住む地方大学生の私は、月に200円の寮費と12,000円の寮食代（朝・夕）さえ払えばOKという、貧乏ではあっても、“なんとなくクラシテル”な状況でした。そういうところに、「みんな嘘くせえんだよ、この野郎」という感じで出たのがこの2冊。後者の「人間は犬に食われるほど自由だ」というコピーは強烈で、数年後、彼女に「月岡くんはどういう死に方したい？」と問われた際、うっかり「野垂れ死に」と答えてしまったのも、この影響が若干あったかと。つまり、無頼派で一匹狼として生き死にしたい、みたいな。

『鉄輪』はそうした藤原さんの回顧的な写真文集で、高校の時に父親の営む旅館が倒産、父母と共に門司から山奥の温泉街・鉄輪に引越し、そこから東京の大学へ進学するまでの2~3年の月日を書き留めたものです。

一読しての感想は、「うらやましい」。引越すまでのかつこいい（と推測される）生活、そして没落後、生計を助けるため働かなければならない試練。転落しつつも、稼ぐために客引きまでやる根性のある70歳（！）の父親（藤原さんに中古ギターを買ってやる思いやりも）。そして、ボケた隣人やその奥さん、旅芝居の座長など、地方の片隅に生きる人々との交流、身近にある死との遭遇、そして東京への旅立ち——。この間、ヤクザの息子と組んで学校でストライキも。慣れないバイトに戸惑う藤原さんを怒鳴り、尻を蹴り上げて働かせつつ、工事完成の際には意識的におひねりをたくさん投げてくれる、泣かせるおっちゃんにも会ってる。もちろん、こうした人々・出来事を克明に記憶に刻み、20年以上経って撮った写真（田舎臭き満点の商店とか、いいんだこれが）と組み合わせて語る藤原さんの力、さまざまな「生」を伝えるこの本の魅力は認めるしかないんですが……もう、魅力的に成長する高校生活がフルセットで揃ってんじゃん、とやっかむ自分もいるわけです。

一方で今、自分がこの本に出てくるような「大人」になれたのかといえば、忸怩たる思いしかありません。人生の陰影もにじませられないし、野垂れ死にする気力もあんまりない。せめて、藤原さんの隣に住んでいたボケおじいさんみたいに、プチ劇的な死に方ができればと思うばかりです（なお、件の質問をした彼女の理想は「南の島の木の下で、美味しい飲み物を飲みながら好きな音楽を聴いて、好きな本を読んでいる時〈昼寝している時だったかな〉に、ヤシの実が頭にこつんと落ちてきて死んじゃうの」でした）。☺